

全道展機関紙“ZEN”第2号 昭和54年6月1日発行
 発行所 全道美術協会 事務局 札幌市西区発寒4条5丁目434-8
 竹内 豊方 T 011 (851) 9141 内 232 (夜間・休日) 661-0673

ZEN

全道展機関紙

NO. 2

北方的表現主義の認識と出発

伏木田 光夫

わが愛する北方の狼達—友—に。

第三十四回の全道展から公募出品規約が一部改正されて、搬入出品作のなかに一点は六〇号以下を入れることになったことは、ZEN 一号で本田明二氏が、きめこまかい文で報告しているの、僕はそのことには触れない。

僕はこの小文で、戦後、作家活動は自由であるべきだと言う名のもとに、公募展で一種のタブー化した絵画運動や、美学について触れたい。

全道展と言う地方作家集団は、会に旗印があつて、その方向に皆んな轡を並らべて進んでいるわけでもないし、僕は繰り返して集団化することから起る保守性や、因習を排除して歩いて来た歴史を持つ。

ただ戦後、嵐のように僕達を捕えた、世界的な美学アンフォルメル運動をくぐったあと、僕は個に帰ることで再出発しなければならなかったようだ。僕は揺れ動き、ある者は難波しそうになり、ある者は一層個の内に帰り、ある者は地方的風土に立脚しようとした。

客観的に見ると全道展の作家群は、十数年をへて、北方的表現主義とでも言うのだろうか、きわめて主観的、主情的作品に辿りついた作家がおおむねに思われる。この一群は今や会の七〇%は占めるに至り、その非論理性、絵画空間の欠如、主観主義が陥る混乱

を繰り返して、袋叩きに会いながら、しかし意外に頑固に進んで来たようだ。

例をあげると、僕は彼等のことをブリュールの頭文字を取って、ブリューの一群と言っているのだが、北方的風土を創造の原点に置こうとしている一群、小川原脩、鶴川五郎、野本醇、瀬戸英樹、手島圭三郎等のバラバラに進んで来た道は地方主義の一つの行き方であつて、ようやく鮮明な方向性を持ち出したことを、ここに乾杯したいと思う。ブリューの一群は歩いて行くだろう。

僕は「我ら一群が、なぜ、かくも表現主義的芸術に辿り着いたか」にはなほだ興味がある。そこで次のような地方作家群の精神的状況を認識することになっている。

僕は、ヘーゲルが現実的なものは理性的であり、理性的なるものは現実的であると考へた、その雄大な理性の神学に対して、人間の精神の不安定性、非合理性の世界により沢山の問題を抱え、分析的思考であるより全一的であり、抽象的であるより具体的で、論理的法則的であるより直観的体験的であること、それ故に感覚知覚の世界に低迷しやすい、安易な表現主義、独善的主観主義に陥りやすいのだが、思考は具体的な事象の本質を直観的、全一的に把握する立場を持つに至っていると言う認識である。

こうした精神風土を持つ北方表現主義は、

分析的抽象的な思考より全一的具体的な思考に進み、理論より生活を、認識より体験を、生命なき秩序よりも生命ある無秩序を愛する方向をとって行くだろうと思つている。

はなはだ哲学的言葉を使つてしまつたが、合理に対し、非合理的表現主義の作家が、こゝろも雁首をそろえると、居直りたくもなるのである。確かに現代理性への信頼から出発した、近代の科学的な実証主義が偉大であつたとしても、人間の非合理は鋭く対立する。

この問題こそ北方的表現主義の認識と出発の原点になるのだと思う。

僕はここで表現主義的絵画のみが全道展の進む道だとは思っていないし、そう言つた芸術のみが優遇されることの誤解を怖れる。

しかし、あえてこの問題を取り上げたのは、あまりにも自然発生的な結果として、表現主義的であると言う芸術を目にすると、原点だけは押えてみたくなつたのである。こう言うことを言つて袋叩きに会うことは作家として望むところである。

第34回

全道展作品公募

大きさ、点数制限なし、但し絵画作品のうち1点は必ず60号以下であること(1点出品の場合は60号以下、会友も準ずる。)

搬入 7月21日(土)・22日(日)

札幌市民会館2F

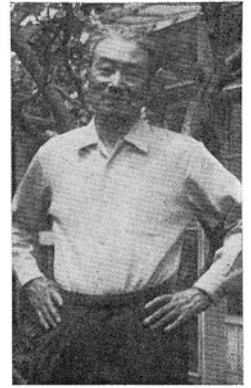
会期 8月2日(木)~12日(日)

会場 北海道立近代美術館

随 想

わが山菜記

池谷虎一



カット筆者

雪が消えると、山野を歩きたくなる。自分の中の野性が山から招かれるのである。早くも萌出るのはフキのトウである。これをきざんで味噌汁に散らすと、早春の香りがある。天プラにするとこれもまた美味である。山溪の残雪のほとりのフキのトウはレモンイエローで、二、三十センチに伸びていても結構食べられる。フキは林間の溪流のほとりのものは、青く透き通っていて、鎌で切るとサツと水が出る。切って水の出ないのは虫がついて中が黒くなっているのである。市販のものは芯の黒いものが多く、少々堅くて不味い。水の出るフキは三本に一本位よりないから、こればかり採っては商売にならぬのであろう。溪流のほとりにサツマ汁の鍋をかけて、とったフキを三、四十分流れにさらしたものを入れて食うと、アクがすっかり抜けてフキとは思えぬ新鮮な味がある。

うまいのは、タラの芽である。タラの木は陽当りのよい所にある。以前湯川女子修道院の少し奥にタラの木の林が二カ所あって、そこで相当の量を得られたのであるが、修道院丘下に市営住宅の大部落が出来てからは、一番芽もすっかりとられるので、今年は相当木が枯れているのでないか、半分位芽を残すのが山菜とりの仁義である。赤倉の山荘に春陽会その他の連中を招いて、山菜の会を催していた小杉放庵が、タラの芽は山菜の王だと言っている。フライにするとウマイと言うが、自分は天プラが好きである。信州では、天プラソバの種にしたり、栽培して東京の高級料理店に出荷しているそうである。

タラの芽をウドモドキとも言うそうだが、ウドとは味がかなり違う。ウドの太い根元の方の皮を剥いて、新しい身欠と生味噌をつけて山で齧るのは、天下の珍味である。ウドは生えている場所によってエゴ味の強いものと淡いものがあるが山で齧るのはエゴ味の少ないものが多い。薄く切って水にさらすとみな生で食へる。茹でてはタラの芽と同じ様に食べる。葉の部分は天プラにしてもよいし、汁

の身にしてもよい。

ウドを保存するのは短期間なら函に砂を盛り、その中にに入れて置くといよい。長くおくには塩漬でもよいが、豆腐のオカラに漬けるのが一番よいそうである。厚岸のさる料亭はいつもウマイので、その保存方法を聞いたが教えてくれぬそうであるが、それはウノ花漬けであろうと言うのである。

早く出てウマイのにキトビロ、又の名はアイヌネギがある。ニラに似てずつとコクがありいかにも山菜らしいウマさがある。学名はギョウジャニンニク、近頃八百屋の店頭にも並ぶ様になったが、沢山食うと終日口からニンニク臭が抜けない。換気の不完全なトイレならこれも相当臭くなる。夕食以外には食わぬ事である。

コゴミ、このカサネツの類は多少湿地の溪流のほとりに多く、クセのない淡白な山菜である。

ワラビは至る所にある。陽当りのよい所にもあるが、疎林の中や周辺の半陽影の所に太ったものがある。

ゼンマイは道南に多いのでないか。木古内から江差へ出る国鉄江差線の湯岱あたりに、本州から来た商売人が毎年河原に釜を据えゼンマイを茹でて、河原に乾して持帰るそうである。ワラビはとりたてのものを、アクを抜いて食うのがウマイが、ゼンマイは干したものがウマイ。

花の美しいのは、エゾエンゴサクとカタクリ、黄花のエゾノリユウキンカである。カタクリの山の斜面に群生して咲いているのは美事である。山菜の本には花も葉も食へるとあるが、花を多く食うと必ず下痢をする。葉は丸やかな甘味があつてうまいが、これも軟便となる。

これで割当てられた紙数がつきてしまつた。

住所呼称変更と転居

- 谷口一芳 〒0633 札幌市西区
西野4-29-2855、T0011(661) 6138
岸葉子 〒2201 東京都江戸市
東野川3-15-48033、T03(488) 08337
一本万寿三 〒0663 札幌市西区
区山の手1条11丁目7番地 T011(631) 1068
大本端 〒0664 札幌市中央区
円山西町3丁目4-3、T011(611) 07222
尾崎志郎 〒0663 札幌市西区
八軒3条東1丁目4-17、T011(641) 26066
嵐玲子 〒0661(01) 札幌市
白石区南郷通11丁目南1の7、T011(871) 9138
斎藤洪人 〒0662 札幌市白石
区南郷通8丁目南4の20、T011(871) 2371
福井敦子 〒186 東京都国立
市西2丁目21-22高砂荘12号室
佐藤智子 〒057 浦河郡浦河
町旭町26鈴木方
安藤佐智子 〒040 函館市松
陰町14-9
森ヒロ子 〒0669(13) 夕張
郡長沼町東6北3
萩原常良 〒070 旭川市神居
町台場387-10
徳丸滋 〒044 虹田郡倶知安
町宇山田、T013662(2) 1765
西村貴久子 〒0664 札幌市中
央区南6条西22丁目美樹マンシ
ン2号 T011(551) 7729
久守昭嘉 〒0661(01) 札幌
市豊平区清田153-5000、T011(882) 33884
本田明二 〒0664 札幌市中央
区円山西町2丁目9、T011(642) 99001

わが思索と行動



大変な課題を与えられたものと内心おのいている。このテーマに近づく事ができるかどうか解らないが、ともかく勇気をもって書き進んで行こうと思う。

私にとって絵を描くとは何か、という疑問を持つとき、あるいは精神の軌跡を辿るときに、必らずと言ってよい程、ある体験にぶつかってしまう。

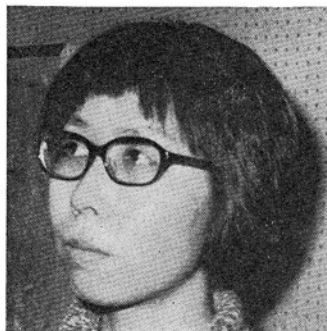
私が11歳のとき、祖母は柱に頭を打ち、それがもとで丹毒になり90歳で死んだ。

それから15年後、自動車事故によって20歳の青年が一週間後に死んでいった。

まさに被害者と加害者の関係であった。世界が一変して、いままで抱えてきた人生観のようなものを完全にくつがえされた。私にとってこんなに不条理な出来事はなかった。その青年は頭に幾重にも包帯を巻かれていた。私は青年の真白な頭部を視つめていたうちに、包帯にくるまれた祖母の頭とが次第にだぶり、二重写しになる幻覚をみた。

存在と絵画

高橋 三加子



深めていかなければならないのだろう。

絵を描く行為の中で特に人間の場合、私はモデルを使って描く事ができない。

今まで辿ってきた内的な心理に起因するのかも知れないが、それよりもむしろ、特定の感情移入を極力避けたい意識が働いているからとも思う。

私の描いている絵は具象画であるが、描き始めのとき、ある抽象的感覚で取組んでいると言っている。それでなお且つ私の場合、結果的に具象画でなければならぬ。

それは言いようのない悲しみと共に訪れ、同時につき上げるような絵を描く衝動につながっていった。

死を通して広がり始めた空虚を、私は内部にある不可視の存在の中で、絵によって埋めつくそうとしているのかも知れない。

——そういう自問がいつもまっわり付いてくる。

私にとっての絵を描く行為のバネは、そこから伸縮するしか方法がないと思ってしまう。私は体験主義者ではないが、経験の重みの中で、絵に対する認識とこだわりを

何故なら、現実を通して働きかけてくる具象性が感情の琴線にふれて、最後にはそれが勝るからである。絵の中の対象物が、妙な言い方だが最終的に無性格なもの、極端に言えば存在の必然性だけがあらばいいと考えている。

しかしながら絵画空間の認識がなければ、存在の必然性は不可能であろう。私はいつもこの絵画空間の前で棒立ちになってしまう。

このジャコメッティの言葉はある警告をうながしているように聞え、絶えず私の脆

弱な感覚なゆきぶり続ける。

質問者——あなたが探求している顔はすべての個々の顔の背後にあるものであり、抽象的と言っているほど普遍的な顔ではないでしょうか。

ジャコメッティ——いやいや、全く反対だ。それがきみであればあるほど、きみは誰のでもいい顔になる……きみは最小限きみ自身であるのでなければ他人になれない、そうではないか。いわば、きみは可能な限り特殊なものを通してのみ普遍的なものに達するのだ。

(ジャコメッティ、私の現実より)

自分自身の精神の「下敷」がある以上、歩く方向はわずかながら垣間みる事ができるが、一体どう歩けばいいのか皆目見当がつかない。ものを視つめるとは私にとってどういう事なのか——精神に忠実であれば、それだけで絵が描けるという事にはならない。

平面を有機的な線や色彩で結果的に埋めつくされているとしても、平面からみえるものをみるという事と、現実にもみえるという事のいわば座標を、一本の線によって結ぶのは不可能なのか——そんな事を考えてしまう。

思考する事と、最も大切な感覚のバランスは絵の中で、感覚で考えるしかないのであらう。

私は未解決な課題を、描く度に現われる疑問を気の遠くなるような制作の場でこれから見つけていかなければならない。

—全道展作家探訪—(2)

木村 訓 丈 会 員

—天と地の間にみるもの—

野 本 醇

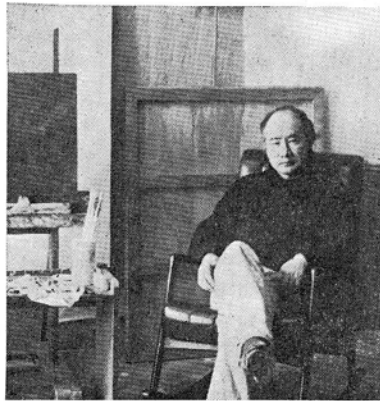
函館駅に着いたとき、生れ故郷の空気があった。かねてから、木村訓丈氏を訪ねてみたいと思っていた。特に彼が一年近いウィーン滞在を終えて帰国したばかりなのでその話も聞きたかったし、なによりも寡作で神秘的な異色作品に引き付けられる自分自身の問いも含めての探訪にあった。

長身で姿勢のよい彼は温和な笑顔で出向かえてくれ車ですぐ赤川水源池奥くのアトリエに向った。

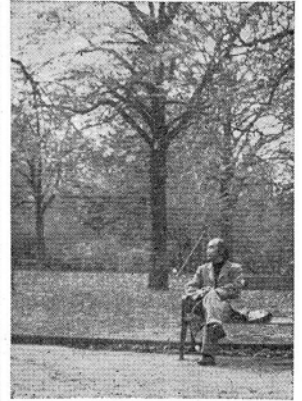
市街地が切れる頃から両側に道南特有のなで肩の低い山が連なり、針の先きほどの枝をもった雑木林や落葉樹のある道に入る。フ

ランスの田舎回りの旅から帰ったばかりの私はまだ旅の延長にある錯覚に捕えられていた。ここです、と言われて降りると、小川を背に片流れの七間×四間程の倉庫のように見える建物がある。芽吹きのおいと川のせせらぎと二匹の白い犬と、まるでワイエスの絵にでて来る風景であった。

アトリエの広い面は壁でそこに、150号から30号くらいの描きかけの絵とか、見覚えのある「あえかなる記憶の朝」(一九七七年)とか、白いカンバスが所狭しと掲げている。不思議なことに、なにも描かれていないカンバスが既に彼の作品になってみえる。近寄ってみる



アトリエで



ウィーンにて

と、下ぬりのホワイトはきれいに磨かれて陶器の表面を思わせる。生の麻布をベニヤ板にびんと張り、一分の狂いなく角材で組立てられた枠に張られて、それは精巧な工芸作品である。彼の制作は良質のベニヤを選び、ボンドで木を締め付け、麻布を張る、その労働から始まっているのをずしりと手ごたえのあるカンバスから感じた。

「一年間は乾燥させるのですよ。」

なめらかで、強靱な獣のなめし皮を想わせる画肌はこの陶器の肌を土台にして生れてくるのだろうか。理性と感情の軌跡をたどって最後の一筆まで行為の時間としてとらまえることのできる彼の絵の秘密はこの精巧につくられたカンバスにあるのだろうか。

一九六〇年代、彼は曼陀羅を抽象形に表現していた。そして精力的にエッチングも制作していた。きぬ糸のように細い線とねじり曲げられた細い面とは、中世の紋様のごとく、はなやかに入り組んで迷路をつくり混沌とした空間を創りあげていた。

冥想の彼にとってマンダラは一体なんであったのだろう。おそらく、東洋の宇宙観であるものの、そこにはユダヤ密教も、輪廻も、生も死も、時間と空間も、その彼方で出合うであろうシンメトリカルな世界も——含む、それが彼のマンダラではなかったかと。とすれば。

《怨亡焼きの煙が天にむかって真すぐ上るのを窓から見ていてね、あれは老人であると信じた》

現在彼が描く、黒いドイツの森を想わせる光る雲海の間隙に横たう荒地に、満月の冷

●全道展企画／札幌会員小品展／6月4日(月)～9日(土)／札幌大同ギャラリー、北3西3角
●第21回学生美術全道展／8月30日(木)～9月4日(火)／搬入、8月25日(日)札幌市民会館2F

札幌時計台ギャラリー

—洋画材料専門の店—

OAK画材

札幌市中央区北1西3仲通
TEL 261-8971

holbein アーチストピグメント

(ホルベイン専門家用顔料)

あなたの手で、油彩画、フレスコ画
テンペラ、日本画、水彩等の古典画法
を再現できます。

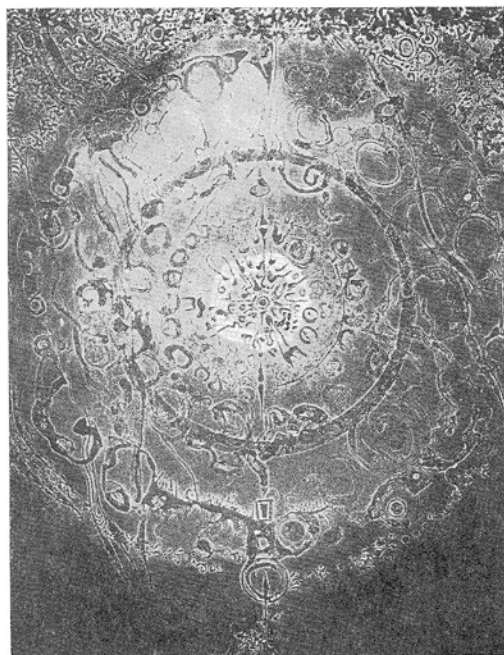
—詳しくは最寄りの画材店で—
ホルベイン工業株式会社
北海道地区総代理店 榊布川

洋画材料

大丸藤井

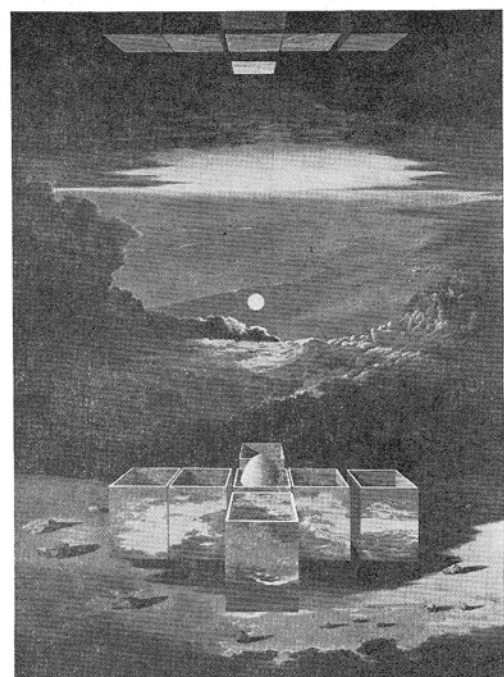
セントラル

札幌・南1西3



雲は厚い黒から暗灰色に少しづつ変化しな

MANDARA (1969)



がら暗い空の隅で一瞬輝いて消える。狂気の満月は天中に在って静止、その下のわずかな空間に荒地が広々と遠近をもちながら翼をひろげ一切の生は絶つていく。地の果てるところ海は風と共にあって風の終るところ再び雲海に月は再生する。昼の意識のなかへの夜の意識の侵入であり、覚醒へ夢の侵入である。彼の絵を上から下に眺めたとき、二枚の鏡を向いあわせにしたときの無限の映像をつくりだす酩酊のくるめきに似た木村訓丈の虚の自然世界にマンダラをみたのであった。

《技術は僕にとって、光や空気やものの境目のためにあるような気がします。》

彼を一年近くもウィーンを離れることなく引きつけたものは一体なんであったのだろうか。動くことをやめた暗灰色の雲に覆われた光のない平板の視界で、自からの光と影を探し求めることではなかったのか。

そこで制作したという十号程の二枚の絵の

ヴィナス誕生 (1977)

なかに、たしかな体験としての思索の美学を見ることができた。

青黒い絵と暗すみれ色の絵は、深い静けさが漂って、自信をもった精神の持続はゆっくり練りあげられた画肌や海や雲や崖のひだまで空気のように貼りつけられた淡い光に証明されていた。

《きようは天気がいよいよってても街行く人の影がボンヤリとみえる程度なんです。それでも飛行機が厚い雲を突き破って天上に飛びだすと真青な空があつて……その下は見廻す限り雲の大陸でしょ……気が狂うよね。》

二年後、彼はウィーンのギャラリー・ラーベン・シュタイクで企画展を開くという。国際舞台で真価を問う日も遠くはない。

《一ことしの全道展には、ぜひ作品を並べたいと思っています。》

彼の作品を訪ねて、天と地のあいだにあるものをみた充実した感情に命を感じた。

●34回展より全道展出品規約の一部が改正され、出品点数、大きさには制限はないが絵画作品のうち1点は必ず60号以下であること(1点出品の場合は60号以下)となりました。会友も準じます。

印刷の美を、私達は考えます



中西印刷株式会社

札幌市東区東苗穂町505番地 ☎011(781)7501

三菱鉛筆

ぜんしんデザイン

良心的な製品



株式会社

松山富縁店

札幌市狸小路5丁目 TEL(代)251-9000

小野 州一

絵を描く事を自分の仕事としてから、四分の一世紀が過ぎたが、残念ながら、まだ独自の理念やテクニクを持っていない。

だから正直言って「私のメチエ」について語るべきものもないが、何を描こうとしてきたか、に就いては自問してみようと思う。

絵を描き始めた時が戦後の混乱期で、様々の価値観が転換して、信すべきものを失っていた時代であり、それに加えて北海道という、伝統や文化の恩恵に浴する事の少ない風土であった為に、全くの徒手空拳で仕事を始めたように思う。

エスキース



そういう時代の、色彩の乏しい荒廃した風土の中で、必然的に反アカデミズム、反写実の立場に立つて、大袈裟に言えば、「詩の視覚化」という大それた野望が、画家を志した初心だったと思う。

だから絵を描くという行為は僕にとつて、仮想敵に対する力づくの反抗の姿勢のようであったが、時代の移り変りと共に日常的な行為へと変容したように思う。

作品の様式も又、非具象から半具象へ、そして今、具象性の強い表現方法へと変化した。

この事はヨーロッパ生活の中で、自然から学ぶより他に方法がない、という反省からの当然の帰結のような気がする。

然し又、具象性が強くなった作品も、この地上に存在する事物総て、空や海に漂う不安な架空の物体として表現してきたように思う。

この事は僕の心底に、東洋の無常感のようなものがあつて然らしむるのか、只単に、僕自身の恣意的資質によるものかは、判然としない。

ただ、物の実在感を追うヨーロッパの絵画伝統とは非なるものがある。

そして又、長い間仕事をしていたのに、いつもの手段で、計画的に作業を進めて完結する——という過程をどうしても自分のものとする事が出来ないでいる。

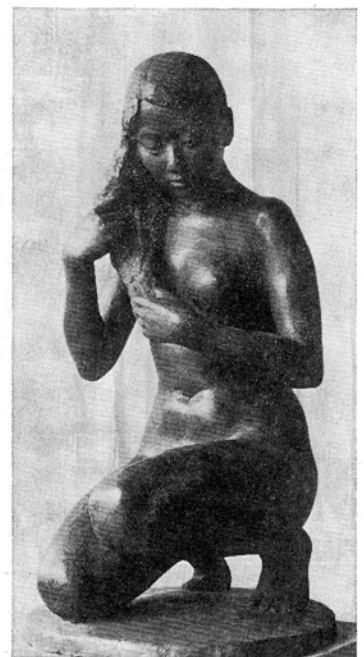
技術の未熟と言うべきだろう。いつも、どうやって描いたらいいのだ、と自問しながらキャンパスの前で呻吟する。

出来る事なら、技巧的であったり、装飾的であったりする事なく、生きもののようなのものの再現を、と願う。

そして又不逞にも、モダンなものではない、と思つているのだが。

わたしのメチエ

わたしのメチエ



秋山沙走武

『私のメチエ』と題して執筆な依頼され、まず当惑している。

私の彫刻は、時折試みるテラコッタの像をのぞけば、殆んど古代の仏像にその発祥をもつ乾漆塑像である。この東洋固有の材質の美しさが好きで、自分自身の中でそれを再現せようと心がけて制作している。乾漆の手触りは金属質と木質に介在する微妙な感触で、木よりは緻密で表面張力にとみ、しかも金属の様に光を撥ねかえす硬さではなく中和な光沢と滑らかな手触りが、肉付のもつ弾力や程よい柔軟性を作調にあたえてくれる。

この乾漆にひかれて師山本豊市先生の門をたいて20年、特異な材質にマッチした幻想をそこからひき出そうと努力して今日に至っている。紙面もないので技法を詳しくのべることは出来ないが、現在行っている脱乾漆法を簡単にのべる。石膏の利用によって八分通りの粘土の原型を石膏の雌型にとり、その内側に漆と布を塗り込めながら適当の強度が出来たときに雌型をとり去り、その上に乾漆の仕事をつづける方法をとっている。そのため最後の残り二分の肉付けが重要なものになる。

最近乾漆の仕事をやる作品がふえて来ているが、この段階が作家の独特な芸境を発揮することになる。私の場合満足いくまで、つけてはけずり、けずってはつける作法が続く、最後にサンドペーパーでとぎ出すのである。漆を彫刻の材料とした以上、漆のもっている特殊性が表現されなければ面白くは言えない。例えば彫刻の表現を大理石の研磨の様に極めて滑らかに仕上げるという場合には乾漆としても表現効果がマイナスになると言うことはない。しかし塑像として完全に作り上げられて、その石膏型に漆をつけて型からはずしたままの場合、科学的に漆には違いないが、人間の感覚に訴えてくるものとしては、せっかくの漆独特の美しさも感じられないばかりか使用目的も消殺されてしまつて、まったく無意味なもので終つてしまう。漆には漆の光沢や目に感じられる柔らかさ、暖かさ、深さなどを充分に利用するだけの配慮と賢明さをもつことが必要である。鏡の様に常に磨きあげることだけが充分な目的とは言えない。ときには彫刻に大切なアクセントの取り方にも関連がある。そのために様々な材料が必要になる。勿論彫刻である以上彫刻の仕事そのものに充分のはたらきがありこまれて表現されなくてはならないのは言うまでもない。

塩入 稔

美幌に築窯して四度目の春を迎えようとしている。

私が「やきもの」のとりこになったのは高校在学中、民芸研究部に入り初歩的な「楽焼」を学び、自ら創り出す色あいの神秘に魅せられたからです。卒業後、こぶ志焼の山岡三秋先生に師事、三年後の春、全道展に初出品（これが同展との出会いである）、翌年秋田県檜岡焼の小松幸一郎先生に師事二年後生家に戻り独立した。

北国の冬の厳しさは身をもつて知っていた私ですが、ろくろを廻す粘土の冷たさは氷のように指先に伝わる。

修業時代、不安とあせりで失敗をしても先生に叱られ、辛くなるとトイレで泣いた事もありました。でも、今は自然の厳しさに屈せず、一生をかけて自分の色を創りつけてゆきたいと思っています。

金澤 実

今日の社会環境のなかで、一個の人間として、好むと好まざるとにかかわらず、近視眼的にその時、その場だけのためにコセコセと無意味と思われる時間を消費しているように思われてならない。

もっと人間的な、むしろ原始の営みにた率直な生き方がしたいと、多少社会常識に反抗したりしてみたりするが、気持ちだけで終わってしまう事が多い。昨年また上野の美術団体で分裂や新たな集団がふくれあがると批判が生まれて分裂がおきるのは仕方ないことで、問題は創造活動とは全く無縁な、あまりにも俗っぽい泥試合を演じた上で徒党的な親分、子分単位で整理されてゆくのかを見聞きしてうんざりしました。

こんな身近なことがらを、自分なりの理屈で絵を画いていく理由付けにしている点もあり、私の追求する主題も、ここらへんに出発点があるのかも知れない。

三神恵爾

私は少年時代より、人工の美と両性具有を嗜好する気質であった。十五歳の時に発見した谷崎潤一郎とカフカの影が、爾來私の美的旅を決定する曳航となつたのである。

時折、私は盆栽について夢想する。自然と人間が手中に治め我意を得る事のできる唯一の贅沢な趣味である。ミニアチュールの意志に込められた、人工の風景としての「自然」があやなす世界に、私は限らない鏡の故郷を覚える。ひと度盆栽の奏でる微細な小宇宙の肌をレンズで

覗き入れば、つかの間のそこは血と快樂の花園であり、たとえば曇に眠るホームクルスの伝説と緊密に交信し、邪悪と聖なる兄弟達の愛で、におうように満ちるのである。それは毒として体を疾駆する。

北海道に毒のある画家が見当らぬのはなぜであろう。毒とは時としてエロチシズムの涙であり、眼球を刺激し美的領域に漲る霊液のことである。

その様な良種の酒と薔薇の日々より、私の見る行為に込めら

わたしの
追求する主題

全道展とわたし

れた銅版に刻まれる眼球の世界は、生まれいづるとも述べておこう。

門馬よ宇子

ふだん歩きなれた街角や、慣れた自然の四季の移り変りの中に、思いがけない感動に打たれることがあります。

その感動や印象を大切にしながら、季節感を主題としたささやかな空想を盛り込み、たのし

い雰囲気のある絵をつくりたいと思っています。

雲間気に溺れてはいけないうと思ひながら、遂に何か無意識に手が動いてしまうのも、私の未熟さからくるのかも知れませんが、

デッサンの力の不足や、造形的構成力などもこれからの私の仕事の課題となることでしょうが、絵画表現の深さや造形の厳しさを身にしみております。全道展のよい先輩に導かれながら大いに勉強いたします。

工藤善蔵

学生時代、北陸金沢での四年と最初の赴任地穂別町富内での四年は、自分が今日絵を描き続けている心情を身につけた大切な頃に見える。四季の変化に、諸々の生命の神秘、そして地に生きる人間のふれあい等……又、帰省のおりにふれ、よく各地を写生して歩いた時の感動も今日の自分の心に深く残っている。自然の広がりの中に、生命の息吹きと群衆のうごめき流れるものを感じ、自分の小ささを知った。今、私は家族をテーマに制作しているが、この群衆の流れに支えられながら、家族がいて自分がある、子供の成長に對し、自分の衰退等を感じ、生きていくことの充実感を覚えるのである。

念があるわけでもないが、身近な一隅を黙として見つめて、画布におさめていきたい。私の全道展も十四年目、今年もどきどきしながら出品したいと思う。

私の身近な絵の仲間で、十数年以上も同じ主題を追求し続けている人達が多数おります。そのような人達を心から尊敬し、私もそうありたいと願っております。しかし現在の私は美術の基本的な事も知らず、常に迷い追求すべき主題どころか、個々の作品についてさえ何を表現しようとしているのか明確に言葉で答えられない事も多い有様です。しかし私の作品にも題名はあり、表現しようとする何等の意図はあるわけで、その意図に無理に理論づけをして「私の追求する主題」は、などと言いたくありませんし、理論づけが出来程のキャリアもありません。現時点では「追求している主題」は残念ながら無いと言った方が正直だと思います。

全力を集中して一つ一つの作品を制作していけば、何年後かにこれが私の主題であったのだと解るような気がするのです。時々、「無手勝流」に木版画を制作して自分を騎士物語に熱中して風車に突進していくドンキホーテのようだと思うことがあります。

佐野敏夫

全道展に關するお問ひ合わせは次のところへ。

・全道農事事務局／063札幌市西区
発寒4条5丁目434-8、竹内豊
方、T011(夜間)9141、
内2332、(休日)(661)
0673

・北海道新聞社事業局文化部全道展
係／060(91)札幌市中央区大通
西三、T011(221)2111

x x x x x

會員、会友で会費未納の方は早急
に納入して下さい。
郵便振替口座、小樽8617、渡
会純价方全道美術協会宛。